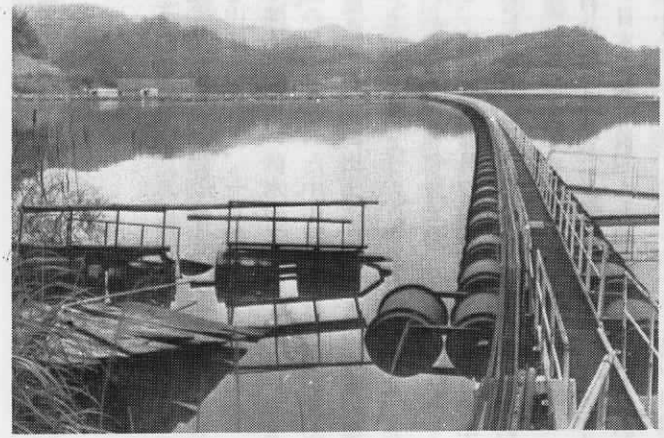
I　花岡事件・30年の壁



中山寮が沈んでいる鉱さいダム

四百十八人

大館市役所から北へ六キロ、小坂鉄道花岡駅手前の踏切を渡って、同和鉱業花岡鉱業所の左わきの山道を登る。歩いて二十分、三方を山に囲まれた、一見美しいダムに出る。近づくと、ツーンと鼻をつく独特のにおいと、金属紛で鈍く光る黒い排水のアワで、鉱さいダムと気付く。この灰色がかった青い水の底に、かつて惨劇の舞台となった中山寮や、鉢巻山が沈んでいるのだ。

昭和十九年八月八日、鹿島組(現在の鹿島建設)花岡出張所に中国人労働者の第一陣二百九十七人が強制連行されてきた。戦争で軍隊にとられた働き手の、いわば穴埋めだった。中山寮に収容され、間もなく鹿島組が請け負った花岡川の改修工事に使われ出した。

工事が始まると、極度に少ない食事と、鹿島組補導員の殴る、蹴るの暴行で中国人はばたばたと死んだ。二十年五月に約六百人、六月に百人が〝補給〟されたが、六月末までの死者は七人に一人、百四十人に達した。

「どうせ死ぬなら、やつらを殺して逃げよう」――怒りがふくれあがって中国人は蜂起した。二十年六月三十日夜十時過ぎ。約八百人が日本人補導員四人と補導員に内通していた仲間の一人を殺して逃げた。が、計画は失敗、中山寮から六キロ東の獅子ケ森(二二五メートル)にたてこもった約三百人も、延べ二万人を超す警防団、警察の山狩りで何人かが殺され、ほぼ全員がつかまった。

事件後の拷問などで七月百人、八月四十九人、九月六十八人、十月五十一人、十一月九人と犠牲者が続いた。戦後も、アメリカ軍や医師の看護も空しく後遺症で死者が続出した。結局、鹿島組花岡出張所に連行された九百八十六人のうち四百十八人が死んだ。働かせるというより、殺すために連行したかのようだ。

戦後三十年。時間の壁に塗り込められ、花岡事件は人々の記憶から消されようとしている。関係者の証言をもとに事件をたどり、戦後とは何であったかを考えてみたい。

全員赤痢

生存者の一人、劉智渠さん(五五)を札幌に訪ねた。戦後、裁判の証人として日本に残り、そのまま住みついた。自分の経営しているパチンコ屋の二階で、当時のことはあまり話したくないというのを無理に聞いた。

◇

ぼくたち捕虜で日本に来た。日本軍隊は中国大陸侵略戦争の時、同じアジア人で同種同文とい

っても、中国人何人か殺してもアリ一匹つぶすみたいな本当に軽い気持だった。日本人でも自由がない時代でしょ……。

本当は日本の労働者と同じ食糧もらっている。重労働は一日米四合五勺ですか、たばこも酒も。ところが鹿島組花岡出張所の河野所長さん、労務主任柴田さん、正社員の人たち、この食糧、ヤミで売っていたらしい。それ裁判の時わかった。秋田県の食糧課で同じ鹿島組にこれだけ出していると。

そしてぼくたち、油をとったあとの大豆カスとリンゴのカス、ごじゃごじゃにして食べさせた。一食、茶飲み茶わん一つぐらいね。それとフキが一食一本。夏はね、リンゴのカスにカビいっぱいで臭くて酸っぱくて、まっ黒になっている。くちくちアワが出てね。それ食べさせてみな赤痢です。それでみんなバタバタ倒れた。

食べても死ぬし、食べなくても死ぬ。工事完成すれば殺されるかこういうふうに少しずつ殺されるか。当時は日本政府がぼくたちにこれだけしか食べさせないと考えてたです。

◇

中山寮で劉さんたちは軍隊式に組織され、大隊長以下中隊長、小隊長、班長。一班は約十人。

劉さんは看護班長で、病人の世話や死んだ人の火葬などをしたという。

話しながら、時折、温和な顔がゆがみ、声が高くなった。体を乗り出し、手ぶりが大きくなる。当時の怒りや悲しみを、どうにも抑えられないようだった。突然、ザザザザと大音響をあげて、隣の機械室から、追加のパチンコ玉が流れだした。

補導員

札幌には、もう一人の生存者李振平さん(五四)が貿易会社を経営している。初めて訪ねた時ぜんそくで寝ていたが、翌日は具合がよくなったからと会ってくれた。中山寮で第一中隊第二小隊長だったから、作業の苦しさをイヤというほど体験した、という。

◇

朝は五時ごろ、軍用ラッパで起こされた。仕事六時に始まるけど、現場まで遠い。四キロはあるよ。それも半分以上山の坂道くだるから、帰る時は大変だった。息切れて私たち休むでしょ、それみつかるとたたかれるからね。

現場いくと、一人一平方メートル割り当て。仕事、平たい地面のところ掘って川つくる。だけ

ど、ごはん食べていないから力でないよ。大きな石とかあると二、三人でも持てない。休むと補導員たたく。こん棒とか、手で。あの人たち、人たたくの平気よ。

一度、左足にでかいできものできたことあるよ。血流れて痛くて我慢できない。それでもこう、片足あげて仕事したよ。まっすぐに立ってられない。次の日、大隊長にいって一日休んだ。そしたら、どして休んだって、ゲタでたたかれた。寮と事務所両方でたたかれ、大分血出たよ。鼻も耳も。

仕事終わるの時間、夜六時だけど、割り当て終わらないと帰れない。自分のとこ終っても、一班の十人のグループ終わらないとダメね。それで、八時か九時までかかってやって、ふらふらなって帰ると、夜のご飯半分減らす。ひどいよ。

着ているものシャツ一枚、下着の上にそれだけ。冬も同じだから寒かったよ。セメントの袋、おなかに巻いたり、ゴザまいて、私たち乞食よりひどかった。足も、足袋の上にワラジだから、仕事すると雪と水でぬれて、足あげると凍るでしょ。みんな凍傷にかかったね。

◇

李さんも、あんまり思い出したくないようだった。当時、中山寮にいた補導員は七人、うち五

人が中国戦線から帰った傷病軍人で、中国語を話した。「今なら恐らく犬も食べない」食事と重労働、殴る、蹴るの暴行。これで、何人もが死んでいった。「よく生きていたよ…」。李さんはポツンといって中空を見つめた。

強制連行

劉さんや李さんは、どうして花岡に強制連行されたのか。

日中戦争の長期化で国内の労働力は極端に不足していた。それを補うため朝鮮人が徴用されたのは昭和十四年から。それでも足りず、政府は十七年十一月二十七日「華人労務者内地移入ニ関スル件」の閣議決定で、中国人労働者を使うことを決めた。

これに基づき、まず千二百四十人の中国人が〝試験移入〟され、「成績おおむね良好」として十九年二月、次官会議で中国人の取り扱い方法の細目を決めた。中国大陸では、これらの政府の方針を受けて、日本軍の「労工狩り」と呼ばれる文字通り人狩り作戦が大規模に展開されていった。

劉さんは十九年四月、人民解放義勇軍（八路軍）として行動中、河北定県で日本軍に捕まった。李さんも解放軍のゲリラ部隊だったが、十九年春、日本軍に包囲され、捕虜になった。当時〝ウサギ狩り戦法〟と呼ばれたこの作戦は、集落を大きく囲み、中にいる敵軍であろうと住民であろ

うと、男という男を根こそぎ捕まえて捕虜にした、という。

日本軍に捕まった李さんは、石家荘の収容所に入れられた。コウリャン飯とスープだけの食事で体が弱り、二ヵ月後に北京に移される時は「ぼいながら」汽車に乗った。北京で二ヵ月、青島に三日いて行き先も告げられずに船に乗せられ、一週間後、下関についた。

青島を出る時三百人いた仲間は下関で二百九十七人になっていた。一人は乗船前に逃げようとして射殺され、一人は海に飛び込み、一人は船中で病死した。下関から、有蓋車にすし詰めされて四日間、その間食べたものは駅弁一個だけだった。花岡駅で、貨車のドアがあいた時、線路に立っておりられず、ほとんど転げ落ちたという。

「捕虜としてでなく、一定期間訓練を受けた労働者を、契約に基づいて働かせる」という政府方針の実態が、実は李さん、劉さんのような強制連行だったのだ。

改修工事

中国人が掘らされた花岡川は、いっぱいに茂った夏草の中を、四、五メートルの幅でゆるやかに蛇行しながら流れている。左岸から右岸まで約十メートル、現在も三十年前とほとんど変っていない、という。

昭和十九年五月二十九日、藤田組(現在の同和鉱業)花岡鉱山の七ッ館坑で落盤事故があり、朝鮮人、日本人坑夫それぞれ十一人が生き埋めとなった。会社側では救助をあきらめて、大量の土砂を入れて坑口をふさぎ、その上に「七ッ館弔魂碑」を立てた。事故の原因は、乱掘で花岡川の〝底が抜け〟て坑内に異常出水したためだった。軍需に追われる鉱山は、採掘を続けるため花岡川の改修工事を計画、当時藤田組から一部下請けしていた鹿島組がこの仕事を請け負った。(注)

李さん　わたしたち、休みなんてぜんぜんなかったよ。休んだのは二十年の正月一日とその前日の半日だけ。雪降っても、風吹いても仕事ある。雪降る前に、毛布一枚ずつもらった。それ、体に工夫してまいて仕事にでたよ。あれで、大分みんな助かった。

劉さん　冬になって死んだ人多くなった。食事してないから体弱っているのに、雪と水の中に入ってあの寒い中仕事するでしょ、それでみんなバタバタ死んだ。毎日何人も死んだよ。

働いていた様子を見ていた人たちの証言をいくつか聞いた。

◇

花岡町、土木作業員木村喜代美さん(四三)　シラミだらけで毎日、朝早く三、四列になって現場に歩いていった。長い列だった。仕事はひどいもんだ。モッコに、スコップ一つか二つぐらい土入れて、よろよろしてやっとかついでいた。骨と皮ばかりでみんな年寄りに見えたな。

花岡町、F子さん(三七)　みんな腹へってんだか、ちょろろーちょろろーと歩いていたなあ。増産増産でこき使われていたんだろうね。

花岡町、信正寺住職蔦谷達元さん(三九)　寺の前で、昼ごはんに小さいマントウとフキを食べているのを見たことがある。隊長のような人に怒られている人もいた。

◇

<注>「鹿島建設百三十年史」はこの工事について巻末年表で「本年中に着工した主要工事……秋田県花岡川河川改修、大森川河川改修……」と書いている。この部分にだけ工事の発注者が記されていず、事件のことにもふれていない。

木箱

そうでなくても少ない食料が、二十年に入るとさらに悪くなった。マントウに入っていたウドン粉がほとんど入らなくなった。補導員のスキを見て食べていた草も、雪の下に埋まっていた。空腹の極限に追いこまれた人間がどうなるか、李さんはそれを見た。

私の小隊に、李相子という人いた。まだ二十歳ぐらいで若いけど、体非常に弱くて、現場で働けないから、死んだ人埋めたり　焼いたりするの仕事に変えてもらった。この人、自分の寝るところに小さな木の箱もっているの。何だろうなと思っていたけど、分からなかった。そしたら、夜になると何か食べてるみたいだった。それで私、ある時、その箱の中見てみた。

黒い焼いたような肉みたいの入っているの。そんな肉あるはずないから、彼に聞いた。はじめは、首をふって知らないっていうけど、何度も聞いたら、人間の肉だって答えたよ。

私怒って殴ったよ。死んだ人の肉食べる、人間のすることでない。だけど、それ食べるの気持ち、よくわかったよ。お腹すいてすいて、道路に落ちてるリンゴの皮でも何でも食べてしまった時だったもの。

◇

李相子は、頭が弱くて是非の判断ができなかったのではない。ひたすら空腹だったのだ。耿大隊長は、この事実を知って「もうダメだ、これ以上は……」と何事かを決意したという。劉さんも、李相子のほかに何人かが、かん詰めのふたで死体の肉をけずり取っていたという話を耳にしている。李さんは、李相子の姿に自分もそうなってしまうのではないか、という気持ちをおさえきれなかった。それほどの空腹だった。

当時、食糧営団花岡精米所に勤めていたK子さん(五七)は「組(鹿島組)には毎日、たくさんお米や食糧いったはずですよ。私が記録していたから間違いないです」と証言する。しかし、李さんたちは空腹のどん底に落とされていた。

診断書

中山寮の寮長代理だった伊勢智得氏(六六)を大館市に訪ねた。横浜裁判で二十三年三月、絞首刑の判決を受けたが、三十一年に出所した。「もう思い出したくない」という伊勢さんに、とにかく聞いた。

◇

―食料の横流しはなかったのか。

「なかったはずだ。上層部はどうかしらないが……。」

―中国人は、空腹でふらふらしていたそうだが。

「腹はへっていた。でもそういうのは(働きに)出さないんだ。病人として、所長(鹿島組花岡出張所・河野正敏所長)に、この人だめだといって休ませたんだ。」

―補導員が中国人を大分殴ったときいているが。

「なかったはずだ。現場は見ていないから、よくわからないが。私は、私は一度もなぐったりしなかった……。」

―だけど、毎日たくさん死んでいる、虐待でないのか。

「医者は赤痢とか、白痢とかいっていた。毎日、花岡病院長の大内さんと、イズミさんとかが来て診断書をとっていた。」

―警察は毎日来ていたのか。

「よく来た。今野さん(大館署特高・今野武夫巡査)大体、今野も悪いよ、本土決戦になれば連中はみんな殺してしまうんだから、そのつもりで働かせろ。来るたびにそうしゃべった……。」

―それで補導員は無理に働かせていたのか。

「だと思うな……。」

―休みもなく働かせたのか。

「雨降っても雪降っても、戦争は休まれないで続いていた。休ませたいとは思った。河野所長には(働きに)出してくれといわれるし……。」

まゆとまゆの間にしわを寄せ、うつろな目でボソリボソリと話す。がっくり落した両肩が痛々しい。この人にとって、あの時以来、時間がとまっているのかもしれない。松田解子氏の小説な

どに出てくるこの人のイメージとは余りにもかけ離れていた。

劉さんは「伊勢さんは少なくともインテリ。補導員のような教養のないヤクザと違っていた。あの人なぐらない、見ているだけだった」と話していた。

同国人

気が遠くなりそうな悪い食事と労働条件の中で、中国人は十ヵ月以上耐えた。すべてが日本軍の指図とあきらめていたし、反抗は事実上不可能だった。しかし、二十年春ごろから、補導員が見せしめに大隊長、中隊長らに同国人を殴ることを強制した時、じっと耐えていた心に怒りの火がついた。劉さんの記憶をたどる。

◇

最初に精神刺激を与えたのは、チョウ・ランエイ(注)という人が殺された時。四月初めごろか。二期の人来る前だった。現場で殴った後、帰ってきて大隊長がみんなを集まらせて、ぼくたち同国人に殴らせた。

やせて骨しかない人、おしり殴らせる。おそらく骨割れたじゃないか。軽くたたくと補導員の連中が「こうもっと強く殴れ」とたたく。通訳の男だれだったか、片足(義足)の鉄でねじるようにして足を踏んだ。チョウさん二、三日後に死んだよ。

二度目は、薛同道という人。働くとき、道に落ちていたリンゴ拾って食べたの。それで、福田か猪股か、なにしろ補導員は毎日人殴らないと生活できない状態の人たちだからぶん殴った。あとで、また全員集めて、皆の前でぶん殴ったの見たよ。あの人、当時二十二歳ぐらい。元気だったけど、足の肉全部落ちてウジもわき、薬もないから骨が見えて、あれで一週間ぐらいは生きてたです。

そして、劉沢玉という三期目に来た人、頭少しおかしい人で、現場で日本人の労務者に両手を出してメシくださいといったです。これを鹿島組の連中が怒って連れて戻って、ぶん殴った後、車のレールを火でまっ赤に焼いて、正座してしばった両足の間に入れた。ジュウッと音して煙が上がって、もう息止まる。水かけて息吹き返させる。たばこやキセル、顔や胸に押しつけたりね。そして、そのあとでまた殴らせる。前の二人よりもっとひどかった。焼けた肉の跡、傷なんかボロボロ。それで決心した。カタキ討ちだよ。

◇

虐待にも限度があるはずだ。肉体的な苦痛に耐え続けた劉さんたちも、罪のない同国人を殴り殺させるという精神的虐待には耐えられなかった、というのだ。

〈注〉中国人殉難者名簿共同作成実行委員会の資料にある張蘭成（当時二三）四月十九日死亡、らしい。

蜂起計画

耿諄大隊長を中心に、ひそかに計画が立てられた。李さんは宿舎が近いこともあって計画に加わり、補導員の目を盗んで四人で蜂起の手順、各小隊の役割を決めた。劉さんが口述した「花岡事件――日本に俘虜となった一中国人の手記」（昭和二十六年、中国人俘虜犠牲者善後委員会）には、蜂起計画の全容が出ている。

「李克金は二十人を連れて事務所の窓口を守る。劉玉郷は三十人を連れて、四方の要地に伏兵をおく。これで、補導員の脱出と逃亡を防ぐ。李黒成は電話線の切断を担当する。張簪武は比較的強壮な同志八十人を連れ、米国人俘虜収容所の日本兵を襲撃する。劉錫方は二十人の同志を連れ

て、花岡警察署を襲撃する。看護班は外で全員が蜂起したのを見すまして、ただちに病人を山の上に移す。最後に、羅士英の監督の下に放火し、中山寮を焼き払う。手を下すのは深夜、補導員たちの熟睡したのを見てやる」。

中国人のほかに当時、花岡に強制連行されていた朝鮮人は約三千五百人。うち、中山寮に近い東亜寮には約三百人がおり、観音寮にもアメリカ兵など約三百人がいた。二期、三期を合わせ約八百人の中山寮の中国人と合同すれば計千四百人。八路軍のゲリラの経験がある李さんたちが考えた計画は綿密で、成功の可能性もあるかにみえた。

李さん　でもね、暴動しても逃げられないと思った。海の国だし、汽車長く乗ったから道わからない。蜂起したのやぶれかぶれ、どうせ死ぬ。でももう補導員の虐待がまんできない。見たくないの気持ちだった。

劉さん　工事完成すればどうせ殺される。遅かれ早かれ死ぬのならと思ったよ。まさか生き残るなんて考えていなかった。

秘密裏に練られた計画が、全員に伝えられたのは六月三十日夕食の後。蜂起の約四時間前だっ

た。中山寮寮長代理の伊勢氏は、蜂起計画があることや、変な空気は「全然感じなかった」という。